



カット・皆川泰蔵

随 想

徳富一敬の憂愁

今 中 寛 司

人間はかつて、現代以前においては、人間の心を直接手握みにするようなことはしなかった。それは決して前近代の人間が無智であったからではなく、事実このような仕方でのみのある数千年の人間歴史を創造してきた。古代人は世界内においてカノンを創造し、中世人は世界外からの福音を信じた(R・



ガルデイーニ『近代の終末』。そして近代人は、もはや何ものにも依存することのない孤高の人間を、この世界の中の、唯一の存在者と規定することに成功した。近代史の栄光は、その意味で破天荒であり画期的であることに、何人も異存はないと思う。しかしこのような孤高の人間が、この大宇宙の中で果して通用するものであるかどうかは、また別の問題である。

蘇峰や芦花の父親、徳富一敬(一八二二～一九一四)は、横井小楠の最初の弟子で、しかも門弟の中で一番頑固な儒教信者であった。その一敬が明治四十年、突如としてキリスト教信者となった。「明治四十年丁未四月十四日、東京市本郷区於茗岐殿坂教会堂洗礼

式、牧師海老名弾正ヨリ撰受ス、再妻久子、長男猪一郎夫妻、二男健次郎夫妻、孫太多雄以下四人列席ス」と、『随感漫筆』で一敬が述べている。しかし一敬が受洗するまでには、永い精神的苦悩の連続であった。「孔門の教え基督の教えは一致にして、基督の靈魂不死の説は漸く精詳を加う、明治三十九年丙午四月十日、始めて祈禱を捧ぐという、時に頽齡八十五歳」(随感漫筆)。このように一敬は決して儒教を捨てたのではない。『吾不与齋漫筆』明治二十五年の条で、「宗教心ハ、是道徳心ノ部内也、道徳心ハ則良心也、人々其事業心ト宗教心ト伴ハザレバ、其功成リ難シ」といつているように、一敬は儒教道徳を宗教と考えていた。小楠や李退溪や大塚退野の純粹朱子学が、明治の近代において、一敬の人生を支えるのに不十分であるにいたって、かれはキリストの福音に救いの手を求めたかのように見えた。しかし一敬が入信後、「毎朝天父ニ祈禱条目」(明治四十二年)に列挙している項目には、剛胆、軽拳、取越苦勞、嗔淫心、善に矜る、小廉局勤、人の非を咎めること、雑念妄慮、以察為明、等を断絶し、海量詳緩をあげている。これは個我的

玉成でしかなく、神の福音を信じることがキリスト教の本領であることを、一敬はついに理解できなかった。

人間主体が歴史的世界を構成する第四番目の次元であることへの一敬の信念は、それが朱子学的ではあったが、まさに正真正銘の近代人のものである。しかし四次元構成の歴史的世界の中において、人間主体が果して第四番目の次元になり得るかどうかにについては、現代史上においても、いまだにその結論の片鱗さえ見えていない。われわれ現代人は、今後、人類のいのちをかけて、この問題にとり組まなければならないであろう。一敬の憂愁は、とりもなおさず、現代人の憂愁でもある。

(文学部教授・文化史学)

## 二つのオフィーリアの絵

石田 章

ロンドンのテイト・ギャラリーに、ミレー (Sir John Everett Millais) の有名な「オフィーリア」の絵がある。「ハムレット」第四

幕第七場の「斜に生ふる青柳が、白い葉裏を河水の鏡に映す岸近う……」(逍遙訳)ではじまる有名な王妃の台詞に語られるオフィーリアの水死を描いたかなり大きい油絵である。

ミレーは、十九世紀中葉、ダンテ・ガブリエル・ロゼッティやホルマン・ハントと共に、いわゆるラファエル前派の絵画運動をおこした画家である。この「オフィーリア」モデルは、後にロゼッティ夫人となるエリザベス・シダルで、彼女は浴槽にひたつてこの絵のためのポーズをとったと言われている。

ミレーの「オフィーリア」は、シェイクスピアの原作に語られる入水の場面をきわめて忠実に写し出している。草深い小川が画面の前方を左から右に流れ、その左上方に、一本の柳の木が枝をひろげて斜めに小川にさしかかっている。オフィーリアは、顔と両手をわずかに水面に出して、小川をゆるやかに流されてゆく。着物のすそは流れにひろがり、右手につかんだ花環はくずれ、草花がそのもすそにからまりながら散っている。かすかに開かれた唇の間からは、彼女のうたう狂気の歌の最後のひとふしがもれ聞えてくるようだ。

「ひろがる菱裾にささえられ、暫時はただよふ水の面。最後の苦痛をも知らぬげに、人魚とやらか、水鳥か、歌う小唄の幾くさり、……」王妃の語るいまわのきわのオフィーリアの姿が、静かな抒情の中に、見事に描きつくされている。

オフィーリアの入水を描いて、私の印象に残っている絵がもうひとつある。昨年、岡崎の市美術館で開かれた「ドラクロワ展」には、シェイクスピアに材をとった作品が幾つか出ていたが、その中のひとつに、「オフィーリアの死」と題する油絵があった。ルーブルの所蔵する十号たらずの小品だが、いかにもドラクロワらしい持ち味がこめられていて面白かった。ドラクロワは、シェイクスピアの芝居の名場面を材にしてずいぶん作品をかいている。この十九世紀ロマン派の巨匠にとって、シェイクスピアの強烈なドラマの世界は、願ってもない題材だったにちがいない。ドラクロワの「オフィーリア」は、ミレーのそれと全く対象的である。ミレーの細面のオフィーリアに対して、ドラクロワのオフィーリアはまことに豊満な肉体をみせる。上半身はあらわな裸身である。右手は川ぶちの樹

の大枝をつかみ、身体をよじって流れにさら  
らおうとする。暗くしぼんだ眼は、狂気と  
もに一瞬の恐怖の表情をもあらわしている。

(同じ構図のリトグラフでは苦悶の表情がも  
つとはっきりよみとれる。) 小川の奥はうっ  
そうとした茂みで暗く、不気味である。ただ  
深い木の間をmelerる光りだけが、この不幸な  
乙女の死の一瞬を浮きぼりにするかのよう  
に、彼女の周辺にきららかな輝きを与えてい  
る。

ドラクロワのオフィーリアは、一見して、  
シェイクスピアの原典とはずいぶんかけはな  
れているような印象をうける。オフィーリア  
がしがみついている樹は明らかに柳の木では  
ない。着物のもすそを水面に揚げ、人魚のよ  
うに水底に沈んでいったというオフィーリア  
の姿は、この絵からはとても浮んでこない。  
が、それなのに、この絵をじっと見ている  
と、この薄幸の乙女の、苦しみ、悲しみ、哀  
れさが、不思議に画面の底からじみ出てき  
て、私の心をゆさぶってくる。

一見、シェイクスピアを無視し去っている  
かにみえて、実は、ドラクロワは、ミレーと  
は全く別の意味で、シェイクスピアのドラマ

の心髄を完全につかみきっていたのである。

(女子大学教授)



(58頁より続く)

付記

アームスト大学に関する昨年度の統計を若  
干引用してご参考に供したい。

学生数 一、二三四名

専任教員数 一四〇名

学費(舎費、食費を含む)

三、四〇〇ドル

健康保険、自治活動費

一〇〇ドル

奨学金 貸与金支出総額

七三〇、〇〇〇ドル

敷地

七〇〇エーカー

建物数

五二棟

図書館蔵書数

四〇五、〇〇〇冊

定期刊行物

一、四〇〇種類

おもな教育施設 ロバート・フロスト図書  
館。ミード美術館。博物館。カービ

劇場。天体観測所。コンピュータ  
ー・センター。バセット・プラネタ  
リウム。総合音楽館。科学教育セン  
ター。

おもな体育施設 体育館。スクォッシン・コ  
ート。プール。スケート場。テニスコ  
ート(36)。ゴルフ場(9ホール)。  
陸上競技場(3)。

基本基金総額 七一、〇〇〇、〇〇〇ドル  
年間予算総額 九、一〇〇、〇〇〇ドル  
校友総数 約一一、七〇〇名  
(うち日本人) 七二名

日本人に対する奨学金 [新島スカラシップ  
内村スカラシップ  
(各一名、二年間)  
(文学部教授)

